

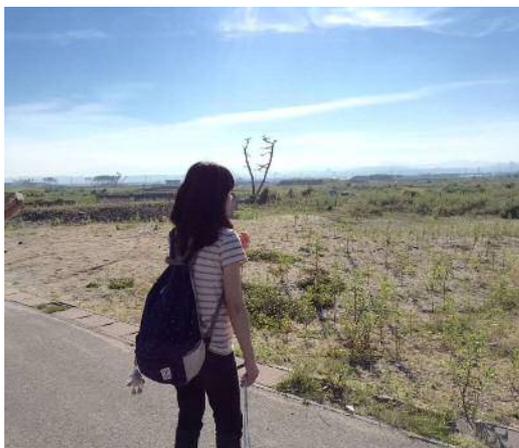
震災支援にゆーす ⑥号

被災体験を聞いて心が震えた

医学生と一緒に月一回第一土曜日に継続している宮城県山元町被災地支援。7月は名古屋大学5年生の女子医学生 K さんが参加しました。大阪民医連事務局上坂さん、コープおおさか病院の佐貫が同行しました。

■復興にむけて

支援は7月10日（金）夕刻に大阪を出発、現地では民医連の薬局法人クリエイト兵庫や兵庫生協連、きづがわ医療福祉生協の職員の皆さんと宮城県南医療生協のある芝田町の宿舎で合流、ナガワ仮設住宅や坂元老人憩いの家の定例班会支援、いつも被災体験を聞かせて頂いているお宅近くの神社の草刈りを分担しました。11日（土）は早朝からいまや定番となった中浜小学校の被災跡や旧山下駅後を回ったあと、草刈りチームを目的地で降ろし医学生の K さんと上坂さんで坂元町の老人憩いの家のコミュニティー支援に向かいました。班会では復興事業に生活が翻弄された方もいて、ある方は急に都市計画が変更され、被災した家から引っ越して新しい家を新築してまもなく道路を造るので、と立ち退きを迫られたそうです。



宮城県亘理郡山元町中浜周辺

■被災地を忘れないために

東北も被災地支援も初めてといていた K さんは健康チェックの時に直接に被災地の方々から被災当時の生々しいお話を聞いて「身体が震えるほどの衝撃」を受けたそうです。「被災地では物理的支援は勿論のこと、心のケアの支援がまだまだ必要。患者は医師に対して自分の不安を言い出しにくい。実際に足を運んでみないと生の声って届かないものですね」と感想を語ってくれた K さん。被災地を忘れない息の長い支援活動を今後も工夫して続けて行きたいと思います。（コープおおさか病院 佐貫 仁）